
Girls bravo another

魔蘿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G i r l s b r a v o a n o t h e r

【Nコード】

N 4 6 6 0 C

【作者名】

魔蘿姫

【あらすじ】

コンプレックスだらけの佐々木雪成の元に現れたのは自分を唯一触れる……二つの世界を舞台に始まる周りを巻き込んだドタバタコメディスタート、

第一話 雪成（前書き）

ファンフィクションです

よろしくです

第一話 雪成

「佐々木雪成！」

「ひい！うわっ！近付かないでよ！」

それは、どこにでもある高校の放課後。小さな少年は女子二人に話しかけられ、酷く困っていた。

何故かと言えば、雪成はよくこの二人、いや女子にあるコンプレックスがあるからだ。

「バーカ、誰が好き好んで『チビ成』なんかに話しかけるかつつの」

「て、ゆうかゝ。放課後、あたしら用あるんだよね。と言うわけで」

「『今日の掃除当番ヨロシク!』」

「え! 今日も……」

脅えながらも不満を漏らした雪成だったが

「あ! ? 何か文句でもあんのかよ! 佐々木雪成!」

女子に凄まれ、あえなく尻込み。

「いえ! そんな、滅相もございません!」

去っていく女子二人にほっと安堵と溜め息を一緒に溢すと教室にトボトボ戻っていった。

「佐々木雪成!」

雪成が振り返ると少し怒り気味の女性教師が黒板を指差していた。

「黒板の上、ちゃんと拭けてないわよ!」

雪成は黒板を悲しげに見る。

「いえ、それは手がとどかなかったからで……」

「手抜きを自分の背のせいにはしない！」

と胸に押し付けられた雑巾より、雪成は押し付けられた手の方が問題であった。雪成の顔が青くなっていく。しかし、女性教師は気付く様子もなく出ていく。

教室に雪成の情けないうめき声が響いた。

そう、この少年こそ地球ともう一つの世界を巻き込む可哀想な女難の主人公なのである。

僕の名前は佐々木雪成ささきゆきなり

ここ、水野高校に通う高校二年生だ。

三月三十一日生まれ、牡羊座のA型。

趣味は釣り。

特技はなし。

背が低く、童顔であることを除けば、どこにでもいる普通の男の子だ……と、自分では思っていた。

でも、背が低いことが原因で子どもの頃から女子にいじめられ続けていた僕は、いつしか女性恐怖症で女性に触られると、じんましんが出てしまうという、極度の女性アレルギー体質になってしまったのだ。

学校でいつもあんな調子の僕にとって唯一、気が休まるのは自宅に居るときだけだ。

父親は単身赴任、母親は父親の面倒を見に出かけてしまっている。でも、ひとりに慣れれば気楽なものだ。

隣に住む、あいつさえ遊びに来なければ。

家に着いた雪成はタオルの下の女物の制服に気付くことなくシャワーを浴びるためにバスルームのドアを開いた。

じんましんが出た僕はシャワーを浴びて気分を晴らそうとバスルームのドアを開くと、そこには隣人。

こじまざりえ
小島桐絵がお風呂上がりなのだろう体を拭いていた。

体に寒気が広がる。
でも、頬は赤らむ。

しらないうちにうめき声が出た。

桐絵は驚いた様に僕を見た後、拳を震わせ、僕を殴り飛ばした

じんましんが……

小島桐絵、八月三日生まれ怒りっぽいから多分B型。

猫みたいな大きな目と大入りの肉まんみたいに大きな胸の持ち主。
同じ高校の同級生で僕の幼馴染み。

「な、なに、桐絵。なんでお前、うちの風呂に…」

「…あたしんちのお風呂、壊れてるって言ったじゃない。昨日もこの時間にお風呂借りにきたはずなんだけど！」

そうでした……

「あ、いや、ごめん。ちょっとうっかりしててさ……」

鬼のような形相で僕を睨む。

「あんたってば、昔っからグズでドジでノロマで頭も悪けりや要領も悪い、どうしようもない位グズでダメな最低男だと思ってたけど……いくら女の子にもてないからって覗きまでするなんて！」

狭い脱衣場を逃げながら雪成は必死に誤解を解こうと話すが相手にされる気配がない。

「そんな、誤解だって！」
風呂場に逃げ込む。

「それに僕は女性恐怖症なんだから、桐絵の裸なんて見たってなんとも思わないよ！」

桐絵がピクツと肩を震わせると空気が変わった。

「それ…どういう意味？私の裸なんてなんの魅力もないってこと…」

「いや、別にそんなつもりじゃ……」

「そう、あんた、あたしの裸なんて見たくもなければ触りたくもないんだ」

僕も健全な男子だし、恐怖症だけど、女の子の体に興味がないわけではない……
触れないけど

桐絵には僕の訴えは聞こえてない様子。

「そう、雪成はあたしなんかどうでもいいと思ってるんだ。今まで散々あんたの面倒みてきてあげたのに」
そして、気付いた。

湯船が光ってる。

「ちょ、ちょっと。ねえ、桐絵。なんか様子が……桐絵？」

ついに堪忍袋の緒が切れた。

「バカ！！！」

見事な膝げりを顔をもらう。桐絵はバスタオル一枚の自分の状況分かっ
っていないのか。
雪成は

丸見えだ

と、心で呟くと光っているお風呂に服を着たまま、吸い込まれる様に落ちた。

今だ、怒りに震える桐絵であつたが、ふと雪成がいなくなったことに気付いた。

「…雪成？」

雪成は青の永遠に広がる水の中を沈み続けている。

どうして…どうして僕の周りにいる女の子は乱暴でガサツな子ばかりなんだろう

どこかに優しくて、僕のことだけ大切に思ってくれる女の子はいないのかな

光が見えた

光が広がる

ピンクの髪の子と僕は明らかに僕の家のお風呂と違う立派なお風呂に入っていた。

君は……誰？

こうして、僕の生活は騒がしくなっていくのだ。

,

第二話 最悪だ

最悪だ……

見知らないお風呂場に僕は見知らない女の子と二人きりで立っていた。

「あれ、ここ、僕の家のお風呂じゃない……」

困惑する僕に何を思ったのか近付いてくるといきなり抱きつかれた。

「やっと……やっと会えました」

女の子の柔らかな体の感触を味わうと同時に女性恐怖症が発動してしまった。

女の子を振りほどくと反対方向へ後退する。

「うわあ！」

女の子はそれを気にすることもなく次々と質問してくる。

「お名前は？…どこに住んでらっしゃるんですか？…趣味は？…好きな食べ物は？」

それどころじゃない僕はお風呂から走って逃げようと方向転換をすると背中に抱きつかれてしまった。同年代に抱きつかれるのなんて今までなかったから頬が赤らんだままだ。

「お願いしますから教えてください。せめて、好きな食べ物は」

「やめて！女の子に触られると……ああ！もう来てる来てる！」

騒いでしまった雪成は足を滑らせ、お風呂の縁で頭を打ち気絶した。

「あの…大丈夫……ですか？」

心配そうに雪成の顔を覗き込むと

「えっと、どうしましょう？」

と、少女は呟いた。

僕が目を覚ますとピンクの髪の子が僕を覗き込んでいた。ソファーに寝かせてもらってるみたいだ。

「目が覚めましたか？」

僕に微笑みかけながら優しく聞いてきた。まだはつきりしない頭で頷くと女の子は自分の名前を言った。。

「私はミハル・セナ・カナカといいます。ミハルと呼んでください」

「ミハル…ちゃん？」

「それであなたは？」

「佐々木雪成」

「さきさきうなぎっ…ささ…きゆき…なり？」

「雪成で構わないよ」

「ゆき：なり：さん？雪成さん」

そこで僕は気付いた。

さっき、ミハルちゃんに触られた。

おお慌てで袖をまくるがそこにじんましんはなかった。

「あれ？じんましん：でてない。でも」

ミハルちゃんに触られたはず……

さらに状況確認。

僕の家じゃない。少し文化が違う家だ。

状況を整理する。

「帰ってきて、シャワーを浴びようとして桐絵が僕に膝げりを……」

それから、それから……

「うわー、うーん」

雪成が頭を抱えるとミハルも真似して頭を抱える。

ミハルはわかっていない。

「あの、どこかお体の具合いでも…あ、お食事でも、どうですか？私、色々作ってみたんですよ、ほら！」

ミハルは満面の笑みで料理を出す。

雪成は気付いていない。

ミハルはそれを食べたくないのだと、とると料理をまた机に戻した。

「美味しいのに……トゲビラはセイレンの名産なんですよ。トゲビラのパエリア。私の得意料理なんですよ」

「日本じゃなくて外国？」

「それが雪成さんの好きな食べ物なんですか」

「でも、セイレンなんて聞いたことないな」

「はい、私も残念ながら、きっと美味しいんでしょうね」

「そもそも、こんなところにいることが不思議なわけで……」

「名前からすると皮はサクツと芳ばしくて、中はトロリー熱々のあんが。ちよつと酸味がかった感じがするんですけど……」

全く話がかみ合っていない。

そして、雪成は最悪の状況を考えて。

「地球ですらないのかもー！」

地球という単語にミハルは反応した。

「雪成さんは地球からのお客様なんですか？」

「君、何か知ってるの？」

「はい、もちろんです」

ミハルはベランダに近付くとドアを開け放った。

「ようこそ、雪成さん。青き森の都セイレンへ」

そこには西洋を感じさせる町並み。町中に水路が網目状に広がり、美しい自然が町の所々にある。

「こ、これは……」

「あれが地球です」

ミハルは空へ指を指した。そこには衛生写真で見たことがあるような青い星。

地球があった。

どうやら悪い予感が当たったみたいだ。

「近くにあるのに遠い。誰もが手が届きそうで届かないそれが地球」

雪成はベランダに座り込み

「最悪だ」

と呟いた。ミハルは雪成の状況をわかっていない様子で雪成を覗き込んだ。

「？」

,

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4660c/>

Girls bravo another

2010年10月9日13時55分発行